

新発想で新事業 チャンスをつかむタイミング

あさひかわ
先頭集団

有限会社エー・アイ・エス

「機が熟す」という言葉がある。物事を始めるのにちょうど良い時、という意味だ。自分の発想が周囲になかなか認められなくても、あせったり、あきらめたりせず、認められる時期がくるのを待つ。成功のためには、時にはそんな姿勢も大切だ。旭川の機械設計会社(有)AISは、まさにそのスタイルで、新規事業を起こすことに成功した。

「一人でやってみたくなり」、15年間勤めた会社を退社したのは、38歳の時。確かな腕を持った技術者であるため、独立後も仕事に困ることはなく、機械メーカーから依頼され、主にコンベアなど搬送用機械の設計を手掛けてきた。「こういうものができるかとメーカーから出されたアイデアを図面にするのが、私の仕事。何も無いところから物を作ることが、面白いんです」。しかし、商品開発を目指すメーカーの戦力として働くことにやりがいを感じる一方で、将来的には、自社で物を作って売りたいという気持ちも持っていたという。「だから、会社の定款には最

コンビニの店頭でひらめいたアイデア

子供の頃から機械いじりが好きだった。「スボーツなんか全然しないで、朝から晩まで何か作ったり、壊れたものをドライバーで分解したりしていましたね」と振り返る。旭川の工業高等専門学校を卒業した後は、機械設計一筋。東京の会社で2年働き、帰郷して入社した木材関連会社では木材の皮を剥く機械の設計などを手掛けた。

初から「製作」の項目も入れていました」。そのアイデアは、ふとしたことからひらめいた。6年前の夏、息子と海へ行く途中に寄ったコンビニエンスストアの店頭で一服しながら何気なく自分の車のタイヤに目をやった。雪道で滑るようになったため、はきつぶすつもりで使っていたスタッドレスタイヤだ。「ほとんど磨り減っていないのにどうしてタイヤを交換しなきゃいけないんだろうな」と、その時、疑問に思ったんですよね。そして、もし、タイヤの表面が劣化して滑りやすい状態になってしまふのなら、表面を削ればいいんじゃないかと考えたんです。そこで、インターネットなどでタイヤの表面を削る機械を探してみたところ「意外でしたが、見つかりませんでした。それなら、自分で作ってみたらどうだろうと思っただけです」。しかし、自己資金を投資するにはリスクが高い。すぐに作れるものではなく、時期をうかがうことにした。



代表取締役
松井 隆さん

有限会社AIS(エー・アイ・エス)

1996年設立の機械設計会社。自社で初めて開発したタイヤ再生研磨加工機「けんま君」(特許出願中)を今冬、市内外3ヶ所のサービスステーションで実稼働させる。

■旭川市緑が丘東1条3丁目1-6

■電話0166-60-5677





3度目のトライで得たチャンス

そして「頭の片隅ですつと考えながら」1年が経った頃、ベンチャー企業を対象とした補助金申請の機会を得た。すぐにこのアイデアを応募したが「いいところまでいったようなんですけど、結局ボツになってしまったんですね」。そして、き出しに入れたままになりましたね」。そして、さらに2年ほど経過。日々の仕事に追われる中、ふと「またやってみようかな」と思い立つ。今度は、新規事業を対象とする公的機関の補助金を申請。同時に、同じく公的な研究機関の協力を得て、タイヤの表面を削ればグリップ力が復活するということをきちんと実証することができた。しかし、データを添えたにも関わらず「この時も補助金はもらえなかったんですね」。

二度続けて補助金の申請が通らない現実。しかし、決してあきらめたり、落ち込んだりするとはなかったという。「実際、それまでもこのアイデアを周りの人に話すと、10人中9人に理解されなかったんですね。でも、一人はいいと言ってくれるんだから、全くダメなわけではないはずだと思いました。とにかく補助金がつくまでは続けようと思って、何年先でもできる状況がくれば作ろうと考えていました」。あせることなく、アイデアを温めながらチャンスの到来を待ったのである。

そして、昨年の夏、ついにアイデアが認められて、別の公的な補助金が得られることになった。思いついてから約6年、3度目の正直だった。

今冬、開発商品「けんま君」がデビュー

研磨したタイヤの効果は、既に立証済み。タイヤの表面を削る方法としては、一度は刃物を使うことを考え、試作したものの「刃がすぐに切れなくなってしまうんですね。それで、考え直した結果、サンドペーパーを帯状にしたような研磨ベルトを使うことにしました」。回転するタイヤを高速回転するベルトに当てて表面を削るのである。ベルトへのタイヤの当て方や回転速度など、試行錯誤を繰り返してベストなものを導き出した。そして、いよいよ製作へ。「部品の製造、塗装、組み立ては、それぞれ市内の別々の工場に発注して作りました。自社工場を持っていないので、それぞれの分野で一番いい工場を選ぶことができるんです」。

今年一月、これまでどこにもなかったタイヤの

表面を研磨する機械、その名も「けんま君」が誕生した。そして、試作品として市内の自動車部品店に提供、使用したお客様からアンケートをとった。「回収できたアンケートは、すべて「制動距離が短くなり、発進しやすくなった」との回答で、効果を実感して頂けました」。完成から二度目の冬を迎える今年、その効果を知った市内外3ヶ所のサービステーションから「けんま君」の注文があり、いよいよ本格的に稼働することが決まった。しかし、手放して喜ぶのではなく「一年目ですから、色々、対処しなければならぬことも出てくるかもしれません」と気を引き締める。

タイヤの表面を削ってグリップ性能を高めること。それは、誰もが気づきそうである、気づか

なかったことである。「できてしまえば、何だ、そんな簡単なことかと思えますよね。アイデアっていうのは、そういうものなのでしょうね」。並行して開発を進めていた昇降装置は、収穫物をトラックに積み下ろす際に使用するもの。米袋を持ち上げる機械を作ってほしいという農家からの依頼をヒントにして作り、経済紙などにも取り上げられた。「一つ作っても満足することはない、どうすればもっといいものにできるのかをいつも考えています」。既に、次の発想をカタチにするタイミングを見計らっているようである。

号告 次号の読み物は、「あさひかわ先頭集団 (リストラランテジャルディーノ)」です。